

2015 年までの指標の変化傾向の結果概要

2015 年までの各指標の変化傾向について、評価結果の一覧を下表に示した。

	評価項目	調査開始からの変化傾向
生物多様性の状態	種の多様性	全国の在来植物の記録種数が経年的に減少傾向にあった。鳥類やチョウ類、哺乳類の種数には直線的な増減傾向はみられなかった。
	個体群サイズ (個体数)	チョウ類の合計記録個体数が減少傾向を示していた。鳥類の合計記録個体数は全国的に増加していたものの、ウグイス・ヒヨドリ・メジロなど里山で最も普通にみられる種の個体数が減少していた。
	生態系の連続性	テンとノウサギの記録個体数が年間1割ほどのスピードで減少しており、確認できた調査サイトの比率も経年的に減少していた。
	大型哺乳類の動向	イノシシ・ニホンジカの撮影個体数が全国的に増加傾向にあり、カモシカが確認された調査サイトの比率も増加していた。
	水辺や移行帯*	ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヤマアカガエルの記録個体数が全国的に減少傾向にあった。
	定期的な攪乱	草原の開発や遷移によりカヤネズミの生息面積が減少しているサイトが多くみられた一方で、一部では保全対策が成果をあげていた。畑地や湿地を好む、一部のチョウの記録個体数が減少していた。
	生態系の栄養状態	複数の調査サイトのため池で水質の変化が生じていた。ただし、富栄養化に伴う植物プランクトンの増加とは異なる変化も生じている。
	生物の分布や季節性	南方系のチョウ類 6 種の分布は、ナガサキアゲハを除いて拡大しておらず、クロコノマチョウは分布・記録個体数とも縮小していた。カエル類の産卵時期も早まってははいない。
要因	外来種の侵入	外来植物の記録種数が全国的に増加していた。ガビチョウ・アライグマ・ハクビシン・ソウシチョウも記録個体数の増加や新たな調査サイトへの分布拡大が認められた。

※：移行帯・・・異なる環境が徐々に移り変わる地帯のこと。例えば陸域と水域の間をつなぐ水辺などを指す。